

聴覚障害幼児の言語発達支援に対する 視覚教材適用の試み

大 島 光 代 (愛知県立一宮聾学校)
都 築 繁 幸 (愛知教育大学障害児教育講座)
(2004年10月29日受理)

Application of Visual Material to Deaf Child for Language Development

Mituyo Oosima (Ichinomiya School for the Deaf)
Shigeyuki Tsuzuki (Aichi University of Education)

要約 音韻が情報として入りにくく定着しにくい聴覚障害幼児への適切な指導方法を確立することは、保護者支援の領域でもあると考え、音韻獲得のためには概念を先に入れていくべきであるというトップダウンの考え方にもとづいて、家庭でも活用できる視覚的な教材を作製した。今回は、聾学校幼稚部に在籍する就学前段階の3歳児2名、5歳児5名に概念を映像や手話でしっかり理解させながら音韻を獲得させるための教材を開発し、その適用を試みた。その結果、A男はビデオ教材で語彙を増やすことができ、2語文も模倣して話す姿が見られるようになった。B男は、少しではあるが語彙の増加が見られ、手話で2語文を話せるようになった。F男、G男、H男、I男には、視覚に訴える教材が、幼児の興味関心を引き、かなりの時間集中させることができた。概ね、トップダウンの考え方が有効であることが立証され、母親に感覚的なずれがあるために子どもへの適切な指導が難しい場合には、家庭の中で言語指導ができるような教材を開発する必要性が示唆された。早期教育の段階では、子どもが無理なく楽しんで行えるような教材が必要であり、遊びを通して言語の力を高めていくものなど、視覚的な遊具について検討を加えることが今後の課題とされた。

Keywords: 聾学校 就学前の指導 音韻の獲得 視覚教材 保護者支援

I はじめに

聴覚障害幼児をもつ保護者支援の方法には、担任や個別指導担当者、副担任などのアドバイス、母親学級での情報提供など様々な形がある。言語発達の問題が母子関係のつまずきにある場合、母子関係の改善を目指した支援が行われるが、言語発達の遅れは、子どもにも保護者にも大きなプレッシャーを伴う。こうした場合の支援が聾学校の重要な役割となる。

そこで家庭でも簡単に用いることができる視覚教材を開発し、子どもの言語発達を支援したいと考えた。

今回の報告は、開発した教材の利用期間が短期間であり、効果については今後、更なる検討が必要であるが、適用の試みとしてあえて報告する。

II 視覚教材の製作意図

今回、作製した教材は、概念を映像や手話でしっかり理解させながら音韻を獲得させることを意図した。聴覚障害や軽度発達障害の子どもたちにとって音韻情報を入力してことばとして表出することは、かなり難しい課題である。早期教育の段階では、手話の使用を認めながらも聴覚口話法とキューサインを用いる場合、就学時に書きことばとしての書記日本語を獲得させるためには、音韻の獲得が必要である。田中(2003)

のトップダウンの考え方をもとに教材を試作した。

指導を展開していく際、母親側に何らかの問題があると考えられる場合、指導者側が意図したようには視覚教材を活用してもらえないということもあろう。ビデオ教材だけでは言語発達を促すような取り組みが家庭において期待できないことも予測される。どのような意識の保護者であっても、ある程度同じように子どもの家庭学習をすすめることができるように工夫していくための第一歩として今回、適用を試みた。

III 方法

(1) 対象

聾学校幼稚部に在籍する就学前段階の3歳児2名、5歳児5名に試みた。

(2) 期間

平成16年1月上旬から2月上旬までとした。

(3) 手続き

聾学校における個別指導だけではなく家庭で使うことができる視覚教材を提供し、その成果を分析する。

(4) 教材

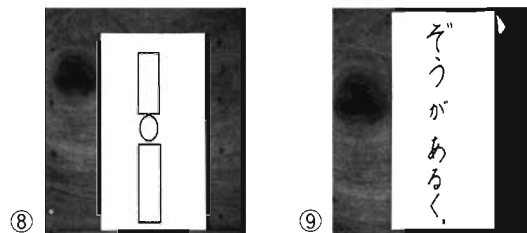
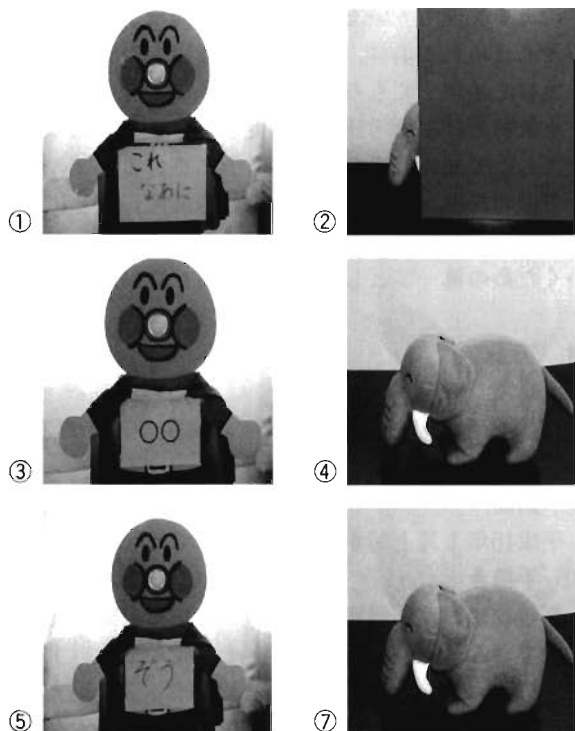
言語発達を目指す視覚教材として以下のようなものを作製した。

ビデオで撮影した映像により実物を見せ、その名前を音韻の数と発語の仕方を電球の光り方で提示した後、ひらがなで名前を示しキューサインと手話で音韻と意味を押さえていく。また動画を見せることにより、2語文で文章表現できるように学習をすすめるビデオ教材である。

【動物バージョン】

- ①ぞう 「ぞうが あるく」
- ②きりん 「きりんが あるく」
- ③ぱんだ 「ぱんだが あるく」
- ④うし 「うしが あるく」
- ⑤ぶた 「ぶたが あるく」
- ⑥さい 「さいが あるく」
- ⑦くま 「くまが あるく」

ぞう、きりん、パンダ、うし、ぶた、さい、くまのぬいぐるみを用い、それぞれの動物を少しずつ見せることにより何の動物かをあてていく。ヒントとして○で表示した音韻数と、アンパンマンの鼻の電光の点滅によりことばの音韻数を教える。ぬいぐるみの全身を見せたら、ひらがなで名前を見せ、キュードスピーチと手話表現を教師が行う。また2語文の学習として、ぬいぐるみが動く映像を見せ、「□○□」のカードを見せる。その後「ぞうがあるく」という文章を見せ、キューサインと手話表現を教師が行う。□には主語、○には助詞、○には動詞が入ることが理解できるように学習をすすめていく。



映像のカットの順は以下のようである。

- ① 初めの画像
- ② 少しずつ動物が見える
- ③ 音韻数を知らせる
- ④ 動物の全身を見せる
- ⑤ 名前をひらがなで表示
- ⑥ 教師のキューサイン・手話
- ⑦ 動物が歩く映像
- ⑧ 2語文表示。
- ⑨ 2語文表示
- ⑩ 教師のキューサイン・手話

【生活用品バージョン】

- ①て 「てを あらう」
- ②はんかち 「はんかちで ふく」
- ③おにぎり 「おにぎりを たべる」
- ④ぱん 「ぱんを たべる」
- ⑤さんどいっち 「さんどいっちを たべる」
- ⑥じゅーす 「じゅーすを のむ」
- ⑦ていっしゅ 「ていっしゅで ふく」
- ⑧えぶろん 「えぶろんを つける」
- ⑨さら 「さらを のせる」
- ⑩おわん 「おわんに よそう」
- ⑪ちゃわん 「ちゃわんを もつ」
- ⑫はし 「はしで たべる」
- ⑬すぷーん 「すぷーんで たべる」
- ⑭ふおーく 「ふおーくで たべる」
- ⑮ゆのみ 「ゆのみで のむ」
- ⑯どんぶり 「どんぶりに 入れる」
- ⑰くつ 「くつを ぬぐ」
- ⑱くつ 「くつを はく」
- ⑲しーる 「しーるを はる」
- ⑳かばん 「かばんを かける」
- ㉑なふだ 「なふだを つける」
- ㉒ふく 「ふくを きる」
- ㉓ふく 「ふくを ぬぐ」
- ㉔ぼうし 「ぼうしを かぶる」
- ㉕ずほん 「ずほんを ぬぐ」
- ㉖すかーと 「すかーとを はく」
- ㉗すかーと 「すかーとを ぬぐ」
- ㉘はみがき 「はみがきを する」
- ㉙はみがきこ 「はみがきこを つける」
- ㉚はぶらし 「はぶらしで みがく」

- ⑳こつぶ 「こつぶに 入れる」
 ㉑はさみ 「はさみで きる」
 ㉒のり 「のりで はる」
 ㉓くれよん 「くれよんで かく」
 ㉔ねんど 「ねんどで あそぶ」

幼稚部での学校生活、家庭での衣食住に関する生活用品とその活用を動画によって見せることにより、2語文及び動詞の使い方を教える。まず、実物を見せる。つぎに、音韻数の○を並べたカードで示し、アンパンマンの鼻の電光の点滅により物の名前の発語の仕方を示す。例えば「ごはん」は、音韻数は3つであるが、発音した際には「ご・はん」で2つとなる。このリズムを電光の点滅で教えるようにした。次にひらがなで「ごはん」のカードを見せ、キューサインと手話表現を教師が行う。2語文の学習としては、実際に実物を用いている場面を映像で見せる。「□○□」のカードを見せた後「ごはんをたべる」などの文章を見せ、キューサインと手話表現を教師が行う。□には主語、○には助詞、□には動詞が入ることが理解できるように学習をすすめていく。

IV 結果

(1) 個別指導における幼児の様子

ア A男の場合

ビデオ教材に関心を示す。ビデオに出演している教師の姿を見て大喜びだった。動物バージョンでは、さい以外の動物は全部名前が分かっていたため、声を出して動物の名前を言っていた。ひらがなでの表記が出ると、合っていれば指導者が「まる」と言うため、ゲーム感覚で楽しむことができた。また「ぞうがあるく」「きりんがあるく」等の2語文については、画面の□の中に入れることばと○の中に入れる助詞を意識しながら、声を出して言うことができた。「～があるく」とう文章を自発的には話せなかったが、ビデオの終盤には、自分から映像に合う文章で話すことができていた。また生活用品バージョンでは、毎日自分が使ったり身に着けたりしている品物であっても、音声言語で話せることばは少ない。ひらがなの文章画面がすぐに出てくるので、自分から声を出して読みながら確認していた。2語文の表現では、動詞と助詞が多岐にわたるため自発的に表現できるものはなかったが、ひらがな文を見ながら自分から声を出して読み、覚えて母親に言う場面が見られた。短時間にことばを覚えるのは苦手であるが、視覚的な補助としてひらがな文が提示されるため、覚えることがスムーズにできていた。飽きることなく40分間にわたってビデオ教材を用いた学習ができた。

イ B男の場合

ビデオ教材に関心を示す。生活用品バージョンの映

像を見せると、自分の生活の中で見かけた物であるため「知っている」と身振りで表現する。名前のヒントとして音韻数が○で表示され、アンパンマンの鼻の電光が点滅すると、自分で同様に拍手をして音韻数を確かめる姿が見られた。その後名前がひらがなで表示されると、声に出して読むことができた。次の動画には、興味深く見入っていたが、2語文を自分から文章で表現することは難しかった。ひらがな文の表示も音読するのに時間がかかる。ビデオをそのまま流しては文章が読みきれないので、一時停止機能を使って画面を止めながら読ませていく必要がある。また意欲はあるが、飽きやすい性格なので、長時間の集中は難しい。せいぜい10分間くらいの時間を、毎日積み上げる方法が適していると考えられる。キューサインは、ビデオ画面を見た後、指導者と一緒にゆっくり行くとできる。手話は、画面の映像を見るだけで、すぐに模倣できた。

(2) 家庭における教材の活用

ア A男の場合

母親には、個別指導の際にビデオ教材の活用の仕方を説明する。一時停止をしなくても、ビデオ教材の間の取り方で十分学習をすすめることができたが、2語文については、覚えて言えれば次にすすむという活用の仕方をして欲しいと伝えた。飽きないよう毎日短時間でも良いので学習を積み重ねて欲しいことや、必ず母親がつきそい、勝手にビデオだけを流しておくような見せ方はしないで欲しいことをお願いした。

イ B男の場合

母親には、個別指導の際にビデオ教材の活用の仕方を説明する。必ず一時停止機能を使い、ひらがなを自分で読ませることや、文章表現についてはビデオの中で指導者が行うキューサイン及び手話表現を見ながら、実際にB男が行うことをアドバイスする。ただビデオを流しっぱなしにするだけでは、B男の力を伸ばすことにはならないので、母親と一緒に学習してもらえようように依頼した。また、時間は5分から10分で良いので、毎日続けることが大切であることを話した。母親は意欲を示していた。

(3) 保護者支援としての成果

ア A男の場合

ビデオ教材をダビングして渡す際に、ビデオを見ながら言えるようになったことばや文章を毎回チェックできる進捗表も手渡した。この進捗表があるためか、毎日頑張って1時間ほどかけながら母親と一緒に学習をすすめている。A男も今のところ嫌がらずにやっているようだが、自分が言えることばや文章のところは集中できるが、分からなくなってくると励まさなければ気が散ってしまうということだった。「分かる」、「言える」という気持ちだが、A男の意欲を支えている

ことがうかがえるエピソードである。

母親は、A男のために有効であると考えられる教材を教師が時間をかけて作製してくれたということに対しては、「自分も頑張らなければ」という前向きな姿勢で反応している。

毎日活用して成果が示されれば、自分の子どもも指導法によっては確実に伸びるという自信をさらに深めることができるだろう。学校の教師と力を合わせ、共感しながら子どもを育てるという姿勢は、この教材を通して確実に伝えることができる。

イ B男の場合

ビデオ教材は、家庭できちんと取り組まねばという気持ちで持ち帰っていった。進度表を見て、一瞬ためらっていたが「やってみます」とのことだった。なかなか自分でB男に付き合いきれず、姉に頼んでしまうことが多かったようだが、少しずつB男の学習はすすめられた。見ている、自分が分かって言えることが少ないため、集中力がとぎれがちであろうことは想像に難くないが、どれだけ励まししながら、B男に頑張らせることができるかに成果はかかっていた。

姉がかかわりながら教材を活用し、B男の言語発達がすすめば、自分の子どもも指導法によっては確実に伸びるという自信を持つことができるだろう。学校の教師と力を合わせて共感しながら子どもを育てるという姿勢は、この教材を通して確実に伝えることができる。しかし、母親がB男に「頑張らせる」というかわりをしなければ、母子関係は好転しないのではないかと考える。子どもが伸びるという実感から意欲を喚起し向き合えるようになるには、まだまだ時間を要するだろう。

(4) 子どもの言語発達を促す教材としての成果

視覚に訴え、概念を先に導入するトップダウンの考え方に基づくものが有効であるかどうかについて3歳児2名と5歳児5名の学習成果について観察した。

ア E男(3歳児 補聴器装用)の場合

E男は、教育相談を受けている時期に、保健センターで「もしかしたら別の障害を併せ持っているかもしれない」と言われている。軽度発達障害を併せ持っている可能性は、担任の目から見ても拭いきれない。言語発達は順調であり、ビデオ教材を用いて個別指導を行うと、食い入るように映像に集中する姿が見られた。2語文は出てきているが、助詞は入っていない。この教材を見ることによって、助詞を意識することができたようである。

家庭で活用した場合、確実にいろいろな表現を獲得できると予想される。

イ F男(3歳児 人工内耳装用 3歳5か月手術)の場合

F男は、2学期終了時にうさぎのことを「うぎ」と

しか言えなかった。音声言語が少しずつ始まった時期で、「ばん」「ぎゅうにゅう」「さんりんしゃ」「はな」「ひこうき」「くつ」「あお」「あか」「もも」「でんしゃ」「ばす」「S男」「T男」「N男」「のり」「はさみ」等の語彙があったが、動物についてはまだ言えない状況だった。冬休みにビデオを渡したが、2回くらいしか見ることができなかった。個別で動物バージョンのビデオを見せた時には、終盤になって「□○□」の表示を見せると、「さい」「が」「あるく」と自分から言えることができた。その場では言えたが、生活場面で同様に話ができるかどうかは分からない。

ウ G男(5歳児 補聴器装用)の場合

G男は、言語発達の面では、5歳児集団の中ではすすんでいる。2語文、3語文の文章で話をすることも多くなってきた。ビデオ教材は、生活用品バージョンを見せる。教師の登場に大喜びだった。「スプーンでたべる」、「フォークでたべる」の助詞が分からなかったが、「おはし」の画像を見た時には「おはしでたべる」と言うことができた。「おわんによそう」や「おさらにのせる」なども動画を見ただけでは、文章で話すことが難しかったが、ひらがなの提示文を見て自分から声を出して言うことができた。

長時間集中できずに、ビデオ教材は20分くらいで止め、以前に遊んだことがあるゲームを始めた。自分のコインは「右から2番目に入れて」と相手に指示して入れてもらう。2学期はどうしても助詞がぬけてしまい、何回言い直しても正しく理解することがなかったが、ビデオ教材で助詞を意識したためか、1回訂正した後は正しく話ができるようになった。また、ボールを投げながら、動作を文章で表現するときには、「G男」○「ぼーる」○「なげる」と書くと、○の中に助詞を正しく入れることができ、母親を驚かせた。

母親はビデオ教材を見て、「日常、助詞が正しく使用できないので間違う度にその都度言いなおしをさせていたが、今回のビデオでひらがな文が動画の後に提示されることでG男の助詞の理解がすすんだ」と話していた。

エ H男(5歳児 補聴器装用)の場合

H男は、教育相談を受けることなく、幼稚部3歳学級に2学期から入ってきた。聴覚障害以外に別の障害も明らかに有していることが分かる。自分の衝動が抑えられなかったり、活動の見通しが立たずに落ちつかなかったりしていたが、5歳児の学年になって随分落ちついてきた。言語発達は、遅れは見られるものの、音韻の獲得やひらがなの読み書きなどに大きな成長が見られた。この教材については、集中力がとぎれながらも、声をかけるとまた画面に集中して、2語文の表現も教師と一緒に自発的に音読する姿が見られた。

ボールを投げながら、動作を文章で表現するとき

は、「ぼーる」○「なげる」と書くと、○の中に助詞を正しく入れることができ、母親を驚かせた。

視覚的な情報は、高い能力を発揮して読み取っていくことができるので、手話表現だけではなく、音声言語を表出することが可能になると思われた。家庭でも、母親と一緒にこの教材を活用して欲しいと話をした。

オ I男（5歳児 補聴器装用）の場合

I男は、言語発達の面では、5歳児集団の中ではすんである。2語文、3語文の文章で話をするとも多くなってきた。ビデオ教材は、動物バージョン、生活用品バージョンを見せる。性格が真面目なため、ひらがなで表記された画面は必ず声に出して音読していた。

映像を見て、何をしているのかは理解できるが、2語文で表現することができたのは「～をたべる」くらいであった。時間をかけて考えさせれば、もう少しできたかもしれない。

ボールを投げながら、動作を文章で表現するときには、「ぼーる」○「なげる」と書くと、○の中に入れる助詞を、迷いに迷って最終的にはまちがえてしまった。助詞を意識しすぎた結果であろう。また「せんせい」○「ぼーる」○「なげる」と書いて、I男にボールを投げさせた後、○の中の助詞を考えさせたときには、前回の失敗を生かして正しく「に」「を」と書き入れることができた。

家庭では、一時停止機能を使って、画面を止めながら「□○□」にどんなことばや助詞が入るかを考えさせてもらうよう依頼した。学習を積み重ねていくことにより、2語文での表出は多くなると思われた。

V 考察

(1) 子どもの変化

A男の場合、既に母子関係は改善されているが、子どもの実態に応じた教材を提供し、子どもの言語発達を促すことで、母親の子育てに対する意欲や自信を喚起し、より母子関係の改善を促すことにつながった。

B男の場合、毎日ビデオ教材を見せ、流しっぱなしにするのではなく、きちんと母親がかかわることにより言語発達を促すことはできると考えられる。教材を渡してから活用する期間がまだ短期間であるため、継続して観察する必要がある。したがって、現時点では、家庭教育力が十分とは言えない保護者への支援として子どもの実態に応じた教材を提供し、子どもの言語発達を促すことにより母親の子育てに対する意欲や自信を喚起し、母子関係を改善することができると十分に確信するには至らない。

しかしながら、E男、F男、G男、H男、I男の初回における教材への反応をまとめると視覚に訴える教材が、幼児の興味関心を引き、かなりの時間にわたって集中させられることが分かった。また教材が意図す

るように、2語文の表出を促すことが可能であった。ただ単発的に教材を見るだけでは、長期記憶につながるとは考えられないので何度も繰り返して刺激を与えていくことが必要だろうと思われる。

教材を保護者に提供してから活用する期間がまだ短期間であるため、継続して観察する必要がある。しかし、子どもの言語発達を促す教材は、視覚に訴えるものであり、概念を先に導入するトップダウンの考え方に基づくものが有効であることは示唆される。

(2) 教材の検討

① 「動物バージョン」のビデオ教材について

ぬいぐるみが歩く動画には、子どもたちは皆、引きつけられた。よく知っている教師がキューサインを行ったり、手話表現をしたりするので、これにも大変興味を持ち笑いながら喜ぶ姿が見られた。

動物バージョンでは、助詞は「が」、動詞は「あるく」と変わらないため、2語文の表現は、動物を1つずつ7種類にわたり、ひらがな文や教師のキューサイン、手話表現を見せるうちに、自分から「～があるく」と表現できるようになった子どもが多い。これはその場だけの記憶であり、長期記憶になっているとは限らないが2語文の構成が視覚的に理解ができたと考えられる。繰り返しビデオを見せることや、「あるく」という動詞について生活の中で用いていくことにより、生きたことばとして定着すると考えられる。

② 「生活用品バージョン」のビデオ教材について

日頃から馴染みの深い生活用品を映像で見せると「知っている」と言わんばかりにビデオに集中する子どもが多かった。動画は、教師が出演しているものと子どもが出演しているものとがあり、どちらも良く見ていた。

生活用品バージョンでは、助詞は「が」、「を」、「で」、「に」、動詞は様々なものを使用するため、ひらがな文を見なくては自発的に文章が言えない。動画を見せた後で、その動作だけを切り取って文章表現するため、子どもたちには分かりやすかったと思われる。ひらがな文は、キューサインを2回、手話表現を2回、教師が行っている映像を見る間に覚えられる子どもが多くみられた。やはり視覚的な情報は、どの子どもにも有利な特性として生かされているのだろう。これもその場だけの記憶から生活場面で使える生きたことばとして長期記憶になっていくと良いと考えるが、そのように仕向けていく大人の援助が必要であろう。

(3) 保護者支援としての成果

A男は、言語発達の成長が見られているため、自信もついてきている。そのためビデオ教材を見せた時に、意欲的に音声言語を表出しようとする姿が見られた。その個別指導の様子を見ていた母親は、視覚的な手が

かりがあれば、通常よりも音韻が早く情報として認知され、短期記憶ではあっても文章で表現できることを肯定的にとらえていた。家庭でビデオ教材を活用するようにダビングをして手渡したが、家庭で学習をすることに対して前向きな姿勢が感じられた。ほぼ毎日、A男につきあってビデオ学習をすすめており、少しずつだが2語文の表出は期待できそうである。

B男は、ひらがなが全て読める段階ではないため、2語文のひらがな文が提示されても、すぐには音読できない。ビデオを流したままでは音韻情報を正しく受け取ることが難しい。ビデオ教材に関心はあるが、分からない情報ではすぐに飽きてしまう。家庭では一時停止機能をフルに使って学習をすすめてもらえるように話をした。母親は本教材がB男の課題とマッチしたものであることを喜んでおり、家庭で学習することに対しても意欲的である。個別指導の担当教師が自分の子どもに適した教材を開発してくれたということに素直に喜んでくれる様子が見えた。このことによって、少しでも学校に対しての信頼感を増し、B男の成長を同じ立場で支援するという気持ちを持ってもらえば、保護者支援の成果とすることができよう。

(4) 語彙の増加

教材を用いた結果、A男はビデオ教材で語彙を増やすことができ、2語文も模倣して話す姿が見られるようになった。B男も少しではあるが語彙の増加が見られ、手話で2語文を話せるようになってきた。音声言語で2語文を話すことはまだ難しい。調査期間が短かったこともあり、今後も続けたい。B男の母親は、自分の子どもに適した教材を作製してもらえたということで、少し気持ちに変化が見られる。家庭でも子どもにことばの支援をしていこうという思いを持つようになっていく。

A男、B男以外の子どもに教材を用いた感触としては、この教材に子どもが関心を持ち、楽しみながら学習できているのではないかとことがある。ただし、ドリル学習的な要素が大きいため、平均して5歳児で20分間の集中が限度であった。毎日、少しずつ習慣づけておけいこをするという教材としては、利用価値はあるであろう。F男、G男、H男、I男の初回における教材への反応をまとめると、視覚に訴える教材が、幼児の興味関心を引き、かなりの時間集中させることができることが分かった。また教材が意図するように、2語文の表出を促すことが可能であった。ただ単発的に教材を見るだけでは、長期記憶につながることは考えられない。やはり、何度も繰り返して刺激を与えていくことが必要である。

VI おわりに

聴覚障害児の多くが視覚優位なために音韻情報を遠ざけてしまうような状況が聾学校早期教育段階の子どもたちの特徴であると言っても過言ではない。また、子どもと本当に向き合うことができない母親には、言語発達を促す子育てが自分には難しいというコンプレックスがあったり、見通しが持てず苦しんでいたりする状況がある。音韻が情報として入りにくく、定着しにくい子どもへの適切な指導方法を確立することは、保護者支援の領域である。音韻獲得のためには概念を先に入れていくべきであるというトップダウン考え方にもとづいて、家庭でも活用できる視覚的な教材を作製した。母親に感覚的なずれがあるために子どもへの適格な指導が難しい場合には、家庭の中で言語指導ができるような教材を開発する必要があると思われる。早期教育の段階では、子どもが無理なく楽しんで行えるような教材が理想である。遊びを通して言語の力を高めていくものなど、視覚的な遊具について検討を加えていきたい。

文献

- 1) 田中美郷 (2003) 聴覚障害教育の新しい方向を目指して 日本聴覚障害教育実践学会第4回大会発表論文集, 1-16.